



## 日本音楽教育学会 ニュースレター

### 目 次

第 34 回日本音楽教育学会全国大会報告 .....	2
神戸大学大会を終えて (岩井正浩)	
学会発表の概要	
総会報告 .....	3
平成 15 年度第 3 回常任理事会・第 2 回理事会報告 .....	7
2003 年夏期ワークショップ in Tokyo .....	9
参観者の目から (阿部いと子 / 河崎秋彦)	
新選挙管理委員会発足 .....	10
選挙人名簿の作成について .....	11
国際会議報告 (村尾忠廣) .....	12
国際会議案内 .....	14
新刊案内 (深見友紀子) .....	15
会員の声 .....	15
第 34 回神戸大会に参加して (細田淳子)	
住所・所属変更及び新入会員住所 .....	17
編集後記 .....	19

## 第34回日本音楽教育学会神戸大学大会を終えて

大会実行委員長 岩井正浩

第34回日本音楽教育学会全国大会は、大会テーマ「国際化社会の音楽教育」で、2003年11月18～19日と、神戸大学で280名の参加者を得て開催されました。内容は、基調講演、シンポジウム、アトラクション、2本のラウンドテーブル、4本のプロジェクト研究、そして63本という数多くの研究発表が組みられ、盛会のうちに閉会しました。中でもアトラクションとして出場していただいた、兵庫県立三原高校郷土部員による「淡路人形浄瑠璃」の公演は、大成功でした。この公演に深い感銘を受けたという多くの参加者からの賞賛と感想は、大会を運営する実行委員会にとってこの上もない喜びでした。

大会会場が分散したり、機器の不備など

でご不便をおかけしたことに關しては、この場を借りてお詫びいたします。できましたら懇親会場の夜景に免じてご容赦いただければ幸甚です。

今後の全国大会への要望として個人的に思い浮かぶのは、研究発表の査読の必要性、パワーポイント使用の発表者増加に伴う対応、プロジェクト研究の精緻化、基礎研究（たとえば歴史研究）重視、そして「音楽教育」を広い視点で把握することなどでしょう。これらを克服して学会が成熟していくことを期待します。

ともあれ、参加者各位が大会の運営にご協力いただき、成功に導いていただいたことに大会実行委員会を代表して心から御礼申し上げます。

### 学会発表の概要（事務局）

本年度の大会の詳細は学会誌で報告されるが、発表の概要について報告する。

#### ・研究発表

本大会では口頭発表63件、ラウンドテーブル2件、計65件の研究発表が行われた。

#### ・プロジェクト研究

下記AからDのプロジェクト研究が行われた。

A：『音楽教育における地域性と国際化～過去・現在・未来～』

B：『音楽教育における哲学の意義』

C：『<ことば>と<音楽>による即興表現の教育的可能性』

D：『童曲再考～その教育的意義を考える～』 箏曲と長唄の童曲を題材として -

#### ・基調講演

国際日本文化研究センター助教授、稲賀繁美氏による講演『比較文化史からみる音楽と文学の東西交流～マーラーの中国趣味を例に～』が行われた。

#### ・シンポジウム（神大会館）

沖縄県立芸術大学の久万田晋、山梨大学ジェラルド・グロマー、宮城教育大学降矢美彌子各氏をパネラーとして、『国際化社会の音楽教育』というテーマで行われた。なお司会は加藤富美子（東京学芸大学）・企画は奥忍（岡山大学）が担当した。

#### ・院生フォーラム（発達科学部F棟2Fロビー）

大会2日目、研究発表終了後に研究交流を目的とした院生・若手研究者への励ましと良い情報交換の場であった。

## 第34回総会報告（事務局）

日時：2003年10月18日（土）17:00～18:00

場所：神戸大学神大会館

開会に先立って「淡路人形浄瑠璃」公演が行われた。その後、定足数が確認され、規定により総会が成立した。

会員総数：1601名（定足数320）

総会出席者数：84名

委任状：275

### 総会の次第

1. 開会の辞（平井健二副会長）
2. 挨拶（神戸大学発達科学部和田進学部長）
3. 挨拶（村尾忠廣会長）  
多数の出席者に対する謝辞。会場提供として、今回の神戸大学の関係者への感謝。
4. 議長選出  
慣例により、東北支部より降矢美彌子が選出された。

5. 報告（筒石賢昭事務局長）
    - 1) 会務報告（平成14年11月8日以降）
- 平成14年
- 11月8日 14年度第2回理事会
  - 9-10日 第33回大会（金城学院大学）
  - 17日 学会誌32-3号念校（事務局）
  - 26日 学会誌・ニュースレター発送（小金井本局）

- 平成15年
- 1月31日 神戸大学表敬訪問
  - 2月9日 平成14年度第4回常任理事会（東京学芸大学）
  - 22日 平成14年度第5回編集委員会
  - 3月10日 武蔵野音楽大学訪問
  - 21日 学会誌32-4号念校（事務局）
  - 30日 学会運営検討委員会（東京芸術大学）
  - 31日 学会誌・ニュースレター発送（東京学芸大学）
  - 4月23日 第二学会誌について検討委員会
  - 26日 平成14年度会計監査

- 平成15年度第1回常任理事会
- 平成15年度第1回理事会（東京芸術大学）
- 平成15年度第1回編集委員会（東京芸術大学）
- 6月22日 学会誌33-1念校（事務局）
- 6月28日 平成15年度第2回編集委員会（東京芸術大学）
- 30日 学会誌33-1号・ニュースレター12号発送
- 7月20日 平成15年度第2回常任理事会（東京学芸大学）
- 23日 第34回大会研究発表受理通知発送
- 8月7日 韓国音楽教育学会出席（会長・事務局長）ソウル
- 28-29日 2003年夏ワークショップ（日本女子大学）
- 9月4日 学会誌「音楽教育実践ジャーナル」創刊号及び第34回大会プログラム・ニュースレター13号発送
- 10月17日 平成15年度第3回常任理事会
- 平成15年度第2回理事会（神戸大学）
- 平成15年度第3回編集委員会（神戸大学）

以上報告され、これを承認した。

- 2) 日韓音楽教育学会姉妹協定締結について（筒石賢昭事務局長）  
8月7日、村尾忠廣会長、筒石賢昭事務局長出席のもと、韓国ソウルにて正式に調印した。
- 3) 日本音楽教育学会英語表記について（筒石賢昭事務局長）  
理事会にて検討した結果、下記のとおり英語表記に改正した。

改正前

JAPAN ACADEMIC SOCIETY FOR  
MUSIC EDUCATION

改正後

JAPANESE MUSIC EDUCATION SOCIETY

4) その他

(1) 各種委員会活動報告

・ 30 周年記念音楽教育事典について  
(山本文茂委員長)

音楽之友社より作業状況の報告が届く。  
現在急ピッチで初稿の戻し作業が行われて  
おり、ページ化するのは11月中旬頃  
を予定。発行日は2004年3月中旬、B5  
版の箱入りで、ページ数は850~1000  
ページを予定している。

・ 編集委員会(安田寛編集委員長)

新しい学会誌「音楽教育実践ジャーナル」  
創刊号を無事発行することができた。  
多くの方が論文等発表して頂けるよう  
お願いしたい。

・ 音楽文献目録委員会(今川恭子委員)

最新版の第31号が紹介された。

(2) 2003年夏期ワークショップについて  
(坪能由紀子副会長)

8月28日・29日に夏季ワークショップが  
日本女子大にて開催された。1日目  
講師は岡田加津子先生、2日目は山内雅  
子先生にお願いし、参加者は約40名で  
あった。参加者からは大変好評で、「こ  
れだけで終わるのではなく、ぜひ実践授  
業もやって欲しい」との声があがり、10  
月2日に山内雅子先生によるフィードバ  
ック授業が行われた。参加者は約20名  
だった。

(3) 学会ロゴについて(村尾忠廣会長)

学会員である松本岳志さん(東京都保  
善高校)のロゴマークに決定。新ロゴは、  
今後学会の出版物等のオフィシャルロゴ  
として使用される。(1ページ右上を参  
照)

(4) 新事務局員の紹介(筒石賢昭事務局長)

長年に渡って貢献していただいた現事

務局員藤下さんが退職の為、新事務局員  
(滝浦典子さん)を採用、紹介した。

6. 協議事項

1) 平成14年度会計報告・監査報告  
(重嶋会計担当理事・岩崎監事)

重嶋理事よりプログラムの84ページ  
を参照して会計報告がされ、岩崎監事が  
監査報告、これを承認した。

2) 平成16年度事業計画(筒石賢昭事  
務局長)

筒石事務局長より平成16年度事業計  
画案について配布された資料に基づいて  
説明、これを承認した。

#### 平成16年度事業計画

平成16年

5月中旬 平成15年度会計監査  
平成16年度第1回編集委員会  
平成16年度第1回常任理事会  
平成16年度第1回理事会

6月中旬 「音楽教育学」第34-1号発行・  
ニュースレターNo.16

末日 研究発表(口述)申し込みメ  
平成16年度第2回編集委員会

7月上旬 平成16年度第2回常任理事会  
研究発表受理通知

8月下旬 「音楽教育実践ジャーナル」2-1号  
発行・ニュースレターNo.17

11月12日 平成16年度第3回編集委員会  
平成16年度第3回常任理事会  
平成16年度第2回理事会

13-14日 第35回大会(武蔵野音楽大学)

12月中旬 「音楽教育学」第34-2号発行・  
ニュースレターNo.18

平成17年

2月初旬 平成16年度第4回編集委員会  
平成16年度第4回常任理事会

3月末日 「音楽教育実践ジャーナル」2-2号  
発行・ニュースレターNo.19  
平成16年度会計決算

3) 平成16年度予算(案)(重嶋会計  
担当理事)

配布された資料に基づいて、平成 16 年度予算（案）を重嶋理事より説明、これを承認した。

- ・ 訂正：印刷費の 2,780,000 円を 2,980,000 円に変更（学会誌費にあてる）。
- ・ 次年度繰越金を 2,640,054 円から 2,440,054 円に変更する。

4) 学会諸会則・規定の改正について（藤沢常任理事）

(1) 会員の選挙に関する規則（第 3 次学会運営検討委員会）

現：細則第 15 条 理事定員は、各地区ごとの正会員数に応じて次のように定める。会員の所属地区は現住所による。  
 新：細則第 15 条 理事定員は、各地区ごとの正会員数に応じて次のように定める。会員の所属地区は現住所また

は所属機関の所在地のうち本人が申し出た地区とする。

(2) 理事選挙の投票数（記名）について  
 現行の投票数（記名）を一部変更するため、細則を次のように変更する。

現：細則 第 16 条 理事を 2 名以上選出する地区は、理事定員の 3 分の 1（小数点第一位を四捨五入）の人数を記名する。

新：細則 第 16 条 理事を 1 名以上選出する地区においては、1 名。2 名選出する地区においては 2 名まで、3 名以上選出する地区においては半数までを投票用紙に記入できる。

なお、3 名以上奇数の地区においては、少数点第 1 位を繰り上げた数を投票用紙に記入できる。

地区理事定数	最大連記数	地区理事定数	最大連記数
1 名	1 名	7 名	4 名
2 名	2 名	8 名	4 名
3 名	2 名	9 名	5 名
4 名	2 名	10 名	5 名
5 名	3 名	11 名	6 名
6 名	3 名	12 名	6 名

5) 入会規則について

現：第 6 条 入会は、つぎの通りとする。

1) 会員・学生会員は、正会員または名誉会員 2 名の推薦を受けて入会を申請し、理事会の承認をへた者。

新：第 6 条 入会は、つぎの通りとする。

1) 会員・学生会員は、正会員または名誉会員 1 名の推薦を受けて入会を申請し、理事会の承認をへた者。

6) 『音楽教育実践ジャーナル』投稿規定について

投稿資格

1. 現行通り
2. 新入会員については、入会と同時に投稿できるものとする。

7) 補正予算について

15 年度予算を下記の通り補正し承認された。補正予算の理由として繰越金の中から研究出版基金に 100,000 円、ゼミナール積立金として 150,000 円を組み込んだことによる。

日本音楽教育学会平成 15 年度補正 予算 16 年度予算 ( 案 )

一般会計

収 入			支 出		
科 目	15 年度補正予算	16 年度予算	科 目	15 年度補正予算	16 年度予算
前年度繰越金	4,140,054	2,890,054	大会運営費	1,500,000	1,500,000
正会員会費	10,290,000 (7000 × 1470)	10,290,000 (7000 × 1470)	大会本部経費	700,000	700,000
			事務局経費	600,000	600,000
学生会員会費			プロシエ外研究	200,000	200,000
団体会員会費	60,000	60,000	印刷費	2,780,000	2,980,000
賛助会員会費	370,000	370,000	学会誌費	2,380,000	2,580,000
学会誌売上金	350,000	350,000	ニュース外費	400,000	400,000
本代			例会運営費	900,000	900,000
送料			通信・郵送費	1,100,000	1,100,000
大会参加費	1,300,000	1,300,000	会議費	200,000	200,000
	(4000 × 325)		旅費・交通費	1,700,000	1,700,000
雑収入	20,000	20,000	宿泊費	200,000	200,000
			事務局費	3,000,000	3,000,000
			事務費	320,000	320,000
			人件費	1,630,000	1,630,000
			事務局運営費	1,050,000	1,050,000
			分担金	140,000	140,000
			選挙費	150,000	150,000
			退職引当金	20,000	20,000
			ゼミナール積立金	150,000	150,000
			研究出版基金	1,000,000	0
			学会基金	0	0
			予備費	800,000	800,000
			次年度繰越金	2,890,054	2,440,054
計	16,530,054	15,280,054	計	16,530,054	15,280,054

## 平成 15 年度第 3 回常任理事会・第 2 回理事会報告

日時：平成 15 年 10 月 17 日（金）13:00～17:00

場所：神戸大学発達科学部大会議室

平成 15 年度第 3 回常任理事会（13:00 15:00）

平成 15 年度第 2 回理事会（15:00 17:30）

出席：村尾・坪能・筒石・伊藤・伊野・今川・奥・加藤・北山・木村・小山・阪井・重嶋・  
島崎・杉江・竹内・中原・藤沢・丸林・南・山本・吉富

欠席：浅井・田邊・野波・平井・丸山

### 【報告事項】

#### 1．会務報告（筒石事務局長）

前回理事会（15 年 4 月 23 日）以降，  
現在までの総務・企画・編集委員会等  
で行われた事柄について報告された。（総  
会報告参照）

#### 2．会長諮問について

##### 1) 第 3 次学会運営検討委員会（藤沢委員長）

最終報告が下記のように行われた

役員の任期について：役員の任期は 3  
年とし，現規約のままとする。

選挙地区の理事の人数と選挙の方法に  
ついて：詳細については総会報告を参照  
のこと。

事務局のありかた：事務局長他 2 名の  
常任理事が面接を行い 6 月から新事務員  
が決められた。

会長選挙における候補者 1 名の場合  
について：一度の選挙しか経験しておら  
ず，規約を改正することは適切ではない  
という理由で現行の規約どおり変更せず，  
選挙を行う。

追加の懸案について：常任理事の人数  
配分，選出方法について検討してほしい  
と会長から要請があったが今後の状況  
を見守って行くこととなった。

#### 3．学会英語表記の改正について

### 総会に報告

#### 4．第 34 回大会について

研究発表 64 本（うち 1 本当日までに  
キャンセル），プロジェクト研究 4 本，  
ラウンドテーブル 2 本，

#### 5．各種委員会報告

1) 30 周年記念事典編集委員会（山本  
拡大編集委員長）

・音楽之友社より作業状況の報告が届く。  
現在急ピッチで初稿の戻し作業が行われ  
ており，ページ化するのは 11 月中旬頃  
を予定。発効日は 2004 年 3 月中旬，B5  
版の横組み箱入りで，ページ数は  
850 1000 ページを予定している。

2) 編集委員会

3) 音楽文献委員会（今川委員）

#### 6．夏季ワークショップについて（坪能委員）

8 月 28 日・29 日に初めての夏季ワー  
クショップが日本女子大にて開催された。

1 日目講師は岡田加津子先生，2 日目は  
山内雅子先生にお願いし，参加者は約  
40 名であった。参加者からは大変好評  
で，「これだけで終わるのではなく，ぜ  
ひ実践授業もやって欲しい」との声があ  
がり，10 月 2 日に山内雅子先生による  
フィードバック授業が行われた。参加者  
は約 20 名だった。

## 7. 地区例会報告

北海道地区 未定

東北地区 12月13日(弘前大学)

関東地区 16年2月(芸術大学)予定

北陸地区 16年2月(上越大学)予定

東海地区 7月17日(名古屋音大)で  
開催。2回目は16年3月27  
日(金城学院大学)

近畿地区 5月10日に開催。2回目は  
16年2月を予定

中国地区 16年2月又は3月に予定

四国地区 8月2日(香川大学)で開催  
2回目は16年2月21日を予定

九州地区 16年3月予定

## 8. その他

### 1) 教科教育学研究連絡委員会について

19期から教科教育学研究連絡委員会は  
学術会議の正規団体(8団体のみ)から  
外れることとなった。会は名称を変え  
新たな団体として活動していくが、日本  
音楽教育学会はオブザーバー会員と言う  
立場になり、学術会議からの助成金はな  
くなるので、会議への出席の為の旅費が  
学会負担となる。

2) 2005年の音楽教育学会夏期ゼミナ  
ールについて、上越教育大学にお願いし了  
承をえた。小川昌文氏が中心になって現在  
準備をすすめている。\*

\*)この項、後日全理事に会長より追加の形で  
報告された。

### 【協議事項】

1. 会則の改定(総会報告を参照)

2. 「音楽教育実践ジャーナル」の投稿規  
定の一部改定について(総会報告を参照)

## 3. 挙管理委員会の発足について

16年度は選挙の年にあたり、その為  
の選挙管理委員会を発足する。

### 手順

1) 12月のニュースレターに所属地区、  
住所変更等の申請用紙を入れ、変更を申  
告してもらう。

2) 変更届の締め切りは1月末とする

3) 名簿の整理

4) 6月中旬、音楽教育学34-1号とと  
もに、新会員名簿を送付する。

5) 会長・理事選挙の投票用紙を6月中  
旬頃送る。

## 4. 第35回大会開催地について

会場：武蔵野音楽大学(江古田)

16年11月13日(土)・14日(日)に決定

## 5. 第36回大会開催候補地について

未定

## 6. 学会ロゴについて

学会員の松本岳志さん(保善高校)応  
募のロゴが採用された

## 7. 新入会員および退会者の承認

新入会 正会員 7名

申し出退会者 1名

自然退会者 52名

15年10月17日現在 1601名

## 8. その他

### 新入会員紹介

3133 大場麻美子 聖セシリア女子短大

3134 能登原由美 広島大院生

3135 丸山誠二郎 城島市立浮島小

3136 樋口 桂子 名古屋音楽療法研究所

3137 藤波ゆかり 東京芸術大院生

3138 若旅理紗子 山形大院生

3139 後藤 桂

## 第一日目ボディ・パーカッションの ワークショップに参加して

阿部いと子 (武蔵野音楽大学)

8月28日, 29日の2日間, 日本女子大学においてワークショップが開催された。28日は, 京都市立芸術大学, 岡田加津子先生によるボディ・パーカッションのワークショップが行われた。参加者は大学や小・中・高校の先生方はじめ学生など40名ほどであった。

ボディ・パーカッションは, からだを楽器に見立て, 動きを伴いながら音楽をつくりだしていくものである。いわば音と身体表現が融合したもので, 音楽の原点でもあり, 最もプリミティブな音であるといえる。このような原始音楽でありながら音楽教育界では, 今なぜか脚光を浴びている表現活動の一つである。ホールに入るやいなや, 講師の岡田先生のまるでダンサーのようなプロポーションと身の熟しに度肝を抜かされてしまった。

初めはエクササイズとして, からだのいろいろな部位をたたき, 音の違いやたたき部位によって強弱を加減するなど, からだ慣らしをした。またアクセントの位置を2拍目, 4拍目などにずらすことで, アクティブ感を引き出したり, 奏法を工夫するなど, さまざまなアイデアが出された。からだをたたいていると, 細胞, 筋肉が解きほぐされ, からただけでなくこころまで解放され, 内面から引き出されるエネルギーを感じた。さらに集中力を伴うので頭まで活性化されてくるから不思議である。そのせいか受

講者の方々の表情から次第に笑みがこぼれはじめ, コミュニケーション空間が生まれた。そうした関係性ができたころグループ分けをして, ボディ・パーカッションによる音楽づくりに取り組んだ。グループ分けは, 2人組, 3人組, 5人組などと小人数から中人数までランダムな組み合わせであった。ところが各グループの作品発表を見て, このグループ分けの効果のすばらしさに驚いた。その人数ならではの作品を見ることができたからである。各グループの作品に関しては, 紙面の関係で割愛せざるをえないが, さすがみなさん指導者だけあって, どの作品も高次の出来栄であった。構成力, 表現力, 音楽性, 創造性はもちろんのこと, ルールや繰り返しなどの約束事を取り入れるなど, 随所に創意工夫が見られた。課題として出されていたA-B-A形式の繋ぎ目なども上手く流れるように構成されていた。またそれらを表現様式としてビジュアル的にも捉えることができた。これはまさに共同創造の過程から育まれた「人間と音楽のコンビネーション」といえよう。また音楽・動き・演劇などの各分野がみごとにコラボレートされた作品であった。全部で11作品であったが, 豊かな即興性とオリジナリティに溢れるものばかりで, まさに未知との遭遇であった。パフォーマンスアートとしての可能性と創造性の深さをあらためて感じた。

最後にボレロとチャチャチャのラテンリズムアンサンブルをボディ・パーカッションで行い、会場はさらなる熱気で盛り上がった。仕事柄、何かと縛られることの多い指

導者にとって、からだもこころもリフレッシュできる場を持てたことと、また研究者同士がこのように分かち合えることは何よりも嬉しいことである。

## 第二日目「日本の音楽の授業を作る」に参加して

河崎秋彦（茨城県水戸市立新荘小学校）

第二日目は東京都小金井市立小金井第一小学校の山内雅子氏による授業づくりコース「日本の音楽の授業をつくる」である。山内氏は「音楽活動を通して友だちと関わり、音楽活動そのものの中で友だちと心を通い合わせながら、時に主張し時に歩み寄り、時にぶつかり時に認め合い、時に溶け合いする中で、人間性や社会性が養われていく場でありたい」という願いを持ち授業を実践されている。

この日々の授業において日本の音楽のよさを十分に生かし、児童の発達段階に応じた授業を展開されている山内氏の授業の様子をビデオ鑑賞や実習の中で実際に体験することができ、私にとって大変有意義な1日であった。さらに今回は山内氏の取り計らいにより、このワークショップにもとづいて10月2日に山内氏の研究授業も行われた。目指す児童像を「自国の音楽のよさを自分のことばと音楽で語るができる子ども」とし、第5学年による「ソーラン

節合唱曲に挑戦しよう」を題材としての授業であった。日本の伝統的な歌の指導法については適切な音源との出会いを大切にすることよい姿勢でお腹からまっすぐに声を出して歌うこと、の2点を基本として行うことを自作の合唱曲「ソーラン節合唱曲」に盛り込み熱心に指導されていた。その山内氏の姿と、生き生きと授業に取り組む子どもたちを実際に拝見できたことは、大変貴重な経験となったことは言うまでもない。山内氏が「当たり前のことを丁寧にすること」と話されたことを私も心に刻み、毎日の授業を行っているところである。私にとってのワークショップの意義は、教えられる側の立場に立つものの見方・考え方が再認識できる機会となるところにあると言える。今後の学会の事業にも期待を持ち、機会があればぜひ参加したいと考えている。

### 新選挙管理委員会発足

来年度は、会長、副会長、理事の選挙です。会長委嘱により以下の方々が選挙監理委員として選ばれました。任期は平成16年1月1日～12月31日までの1年間です。

委員（あいうえお順）

井口太（東京学芸大学）、木間栄子（昭和女子短期大学）、中館栄子（国立音楽大学）、福嶋省吾（白梅女子短期大学）、本田佐保美（千葉大学）

## 選挙人名簿の作成について

10月の総会で会員の所属地区の規程が次のように変わりました。

### 会員の選挙に関する規則 細則第15条

理事定員は、各地区ごとの正会員数に応じて次のように定める。会員の所属地区は現住所または所属機関の所在地のうち本人が申し出た地区とする。

これにより所属地区は、これまでは、「現住所」とされていましたが、あらたに「所属機関の所在地」も含まれるようになり、そのどちらかから自分で選べるようになりました。

例えば、現住所が愛知県で、東京に勤務地（所属機関）がある場合、これまでの所属地区は現住所の「東海地区」でしたが、本人が希望すれば「関東地区」の所属とすることができます。

1. 所属地区変更届（様式1）：来年度の選挙に当たって、名簿を作成しますので、所属地区を変更したい会員は以下の書式にそって記入し、様式1の用紙あるいは形式で事務局へメール、FAXまたは郵送でお送り下さい。

2. 住所等変更等届（様式2）：現所属地区のままの場合は届け出の必要はありませんが、名簿を新しくしますので、所属機関（勤務先）、住所等が変更になっている場合などは様式2の用紙あるいは形式で事務局へメール、FAXまたは郵送でお送り下さい。

届け出締め切り 2004年1月31日

選挙管理委員会では選挙人名簿を確定しまして、6月に会員にお届けする予定です。

様式1 所属地区変更届け用紙

年 月 日

会員番号		氏名	
現在の所属地区		申し出の所属地区	
住所	〒		
* 自宅電話		* FAX	
* 電子メール			
勤務先			

\* 会員名簿に以下の項目の記載を希望しない場合は、上記には記入し、項目を\*でマークして下さい。住所は原則記載させていただきます。

( ) 名簿掲載を希望しない：( ) 自宅電話 ( ) FAX ( ) 電子メール

様式2 住所等変更届け用紙

年 月 日

会員番号		氏名	
現在の所属地区			
住所	〒		
* 自宅電話		* FAX	
* 電子メール			
勤務先			

\* 変更した点にアンダーラインをつけて下さい。会員名簿に以下の項目の記載を希望しない場合は、上記には記入し、項目を\*でマークして下さい。住所は原則記載させていただきます。

( ) 名簿掲載を希望しない：( ) 自宅電話 ( ) FAX ( ) 電子メール

「音楽の知覚・認知と学習」の国際シンポジウム  
- 音楽学・音楽心理学・音楽教育学からの学際的アプローチ -  
in Freiburg, Germany, Oct. 29 31

日本音楽教育学会会長 村尾忠廣



フライブルグ音楽大学を退官する W. Grünh 教授に花束を贈呈する後任教授の J. Klassen 左下は D. Elliott



シンポジウム実行委員長 J. Klassen と筆者  
フライブルグ音楽大学の講演会場にて

マロニエと言えばパリのセーヌ河を連想しがちであるが、晩秋のドイツ、フライブルグもまた街中がマロニエを中心とする黄葉に彩られていた。車が市街から締め出された水路のエコシティ、そして何より哲学者ハイデッガーを輩出した大学の町である。そのためか静かで知的で何かしらしっとりとしている。国際シンポジウム「音楽の知覚・認知・学習 - 音楽学、音楽心理学、音楽教育学からの学際的アプローチ -」はこのドイツ、フライブルグで2003年、10月29日から31日まで開催された。

シンポジウムの目的は実に明確である。大会実行委員長の J. Klassen は次のように述べる。

「音楽学は諸民族の音楽の学習方法やその歴史、認知を扱う学問であったし、また音

楽心理学は何より音楽の知覚・認知能力、その発達を扱う学問である。当然ながら、音楽教育学は音楽学、音楽心理学と密接な関係をもつ。しかし、現実には音楽教育学者が音楽学や音楽心理学者と交流をもつ機会があまりにも少ない。これは、何もドイツだけのことではなく、世界的な傾向であって学問領域の大きな障壁となっている。したがって、このシンポジウムでは、世界的に著名な音楽学者、音楽心理学者、音楽教育学者を招き、共通テーマの音楽知覚、認知、学習という問題を議論したい。」

私がこのシンポジウムの基調講演者の一人として招かれたのはおそらく音楽教育学、音楽学、音楽心理学と等距離で音楽の認知と学習の研究をしてきたためであろう。私にとっては願ってもないシンポジウムであ

る。一昨年、インドネシアのスラカルタで開催された芸術教育の国際シンポジウムがあったが、この時、フライブルグ大学の W. Grün 教授と私が基調講演者として一緒に招かれていた。W. Grün は私の講演内容に非常に興味を抱いたようである。発表の後、フライブルグでの国際シンポジウムの計画について述べ、その際には、私を招待するからぜひ来て欲しいと頼まれていたのだった。それが今回のシンポジウムで実現したということになる。

フライブルグに着いてようやく真相がわかった。このシンポジウムは、W. Grün 教授のフライブルグ音楽大学退官記念事業という性格のものなのである。招待された音楽教育学の講演者は私を含めて Grün とごく近い人、Gary McPherson、David Elliott、それに Margaret Barrett である。私にとっても身内のような人ばかり、今年だけでもいったい何度会っていることだろう。当然ながらシンポジウムは当初から和気あいあいしていた。Gary、Margaret の講演はこれまで何度か聞いたことの繰り返しだったけれど、しかし、それだけにプレゼンテーションのしかたが非常にうまくなっている。一人1時間から1時間30分の講演時間にもかかわらず、聴衆の集中力をつかんで放すことなかった。反対に D. Elliott の話は残念ながら退屈した。彼は、リーマーや音楽の概念学習を徹底的に批判することで頭角を現した人なのだが、それが今回は W. Grün のブレインリサーチを褒めちぎるという講演だった。しかも、プレゼンテーションソフトや OHP などの視覚機材を使わず、ただひたすら用意した原稿を下向いて読むだけの講演なのである。発表は予定時間の半分の30分で終わったものの、会

場から誰も質問がでない。それで、司会の Günter Kleinen が「ブレインリサーチに基づいてどんな音楽を教えるべきか、という問いに答えたいとあなたは述べたが、それは具体的にはどんな音楽なのか」という平凡な質問をした。が、その質問には「どんな音楽を教えるかは、社会や時代によってそれぞれ異なり、具体的には答えられない」と言って逃げた。正解かもしれないが、議論は発展性がなく無味乾燥である。Elliott という人は攻撃型の研究者なのだろう。攻めている時は切れ味鋭く、一斉に賛辞を送りたくなる。今回の講演は魅力、迫りに欠けたが、しかし、それは彼のほんの一部であって本性ではない - そう解説してまわりたいような講演であった。

対照的に私の発表は、すくなくとも会場からいくども笑いをとったという意味で面白いものであった。テーマは「Cognition and Learning Process of Fluctuated Tonic in Western-Japanese Fused Music」というもので、これまでに音楽学会、音楽知覚認知学会、そして昨年日本音楽教育学会くらしきゼミナールで発表してきたテーマである。Gary や Margaret とは比較しようがないのだが、私自身のこれまでの発表と比べれば格段にプレゼンテーションが改善されてきたように思う。内容的にも私の仮説を傍証してくれるような論文があらわれたため、いっそう確信をもつことができた。たとえば、くらしきゼミナールと一緒に発表したゴット (Hermann Gottschewski) さんの論文「“君が代”における和洋折衷」は、フライブルグ出発直前に届いた。ゴットさんは、偶然にもフライブルグ音楽大学の出身である。フライブルグで再会できるのを楽しみにしていたら、私と入れ違いに 11

月から東大の客員研究員として来日すること。フライブルグでゴットさんの説を紹介したらこの音楽大学の先生たちがみんなびっくりしていた。彼が日本音楽教育史の最先端の研究者であることなど知る由もなかったのだから。

ゴットさんとならんで、私の研究に深く関わっているのは、日本のわらべ唄、君が代の和洋折衷と同じ構造の折衷がイスラエルでもおこなわれている、というCohenの研究である。私が彼女たちの研究を和洋折衷と比較しながら論じたため、イスラエルの音楽心理学者のWarren Brodsky（音楽心理学からの基調講演者）が興奮して私に話しかけてきた。要するにイスラエルの大学で講演してほしい、そして共同研究をしようというのである。治安面から躊躇してい

たが、いろいろ話していたら1982年から83年にかけて偶然にもWarrenと私がフィラデルフィア近郊のユダヤ人居住区で近くの家に住んでいたことがわかった。

「ヒロ（村尾）、僕たちは運命的な仲なのだ！」と言われてはもう断れない。ついに引き受ける、と約束してしまった。Warrenの研究、「Mental Representation of Musical Notation」の発表も非常に面白かったし、また、イスラエルにはEvaをはじめ何人かの友人、知人がいる。少々怖くてもイスラエルでの研究はきっと有益なものになるだろう。テーマは決まっている。イスラエル版「異なった様式の子どもの唄における二つのトニック：その折衷と認知、記憶における混乱」である。来年はそうした報告ができるようにしたい。

## 国際学会案内

### MENC 59th National Biennial In-service Conference

第59回全米音楽教育者会議全米大会

ミネソタ州ミネアポリス April 14-18, 2004

MENC（Music Educators National Conference）は会員数85,000名を越える世界最大の民間の音楽教育の団体で、JRMEやMEJ、Updateなど多くのジャーナルを出版し、また「全米芸術教育標準」も作成しています。2年に一度全米規模のカンファレンスを開いており、研究発表、ワークショップ、ポスターセッション、ジョブマーケット、演奏会、教材・教具の展示会等の多彩なプログラムが含まれています。また大学ごとのレセプションも開かれ、多

くの研究者が一堂に会します。今回の開催地はハブ空港の一つミネアポリスですので日本からのアクセスは便利です。4月の新学期の時期ですが、音楽教育の最新の状況や最新のメディアにも触れることが出来、アメリカのスケールの大きさを感じさせるコンベンションタイプのビッグカンファレンスです。例年日本からも10名前後が参加しています。詳細は、MENCのホームページ（<http://www.menc.org/>）あるいは事務局筒石賢昭へ。

## 新刊案内

### 『ポピュラー音楽へのまなざし 売る・読む・楽しむ』

東谷護 編著 (勁草書房) 3,200 円 + 税 2003 年 5 月刊行

本書は、. 研究対象へのまなざし, . ポピュラー音楽を売る, . ポピュラー音楽を読む, . ポピュラー音楽を楽しむ, の 4 部構成。社会学, 文学理論, コミュニケーション論, メディア論, 民俗学, 文化人類学, カルチュラルスタディーズなどの成果を援用し, ポピュラー音楽という文化事象を解説しようとする, 気鋭の研究者たちによる日本初のアンソロジーである。教員養成大学においてもポピュラー音楽を扱った修士論文, 卒業論文が次第に増えている今, 待望のお手本の刊行といえる。こうし

た論文集は対象や分析方法が違うことによって寄せ集めの書になりがちだが, 本書では各論的な掘り下げと同時に理論的な一般化を試みることによって, ポピュラー音楽研究の全容およびその学際性を浮かびあがらせることに成功している。専門領域を超えた横のつながりは音楽教育研究でも不可欠であるので, 方法論のレベルでも多くの示唆を受けるに違いない, お薦めの一冊である。

( 深見友紀子 )

## 会員の声

### 第 34 回神戸大会に参加して

細田淳子

初日の朝はラウンドテーブル1『子どもから子どもへ - 歌はどのように学ばれているか - 』に出席しました。幼児が「きらきら星」のメロディーをどのように他の子に伝えるのか, また学ぶのか, というテーマでした。それを実験的なアプローチで研究している小川さんと, 観察法という手段で研究している今川さんの一騎討ち, という形をとってのプロジェクトで, 聞いていてとても楽しめました。2つの研究方法のメ

リットとデメリットがよくわかるものでしたので, それぞれの立場をとる研究者にとっても, 有益だったのではないのでしょうか。今後も期待したい企画だと思いました。また音楽教育学会の中で幼児音楽というジャンルがクローズアップされたことも, 私は嬉しく思いました。惜しむらくは時間が短かったことです。

そのあと私は, 『オルフの身体楽器に取り組んで - 幼児から保育士までの 36 年間

-』というテーマに惹かれて、その研究発表を聞きに教室を移動しました。オルフのボディー・パーカッションについて実践ジャーナルに書かせて頂いたばかりの私にとっては、ぜひ聞きたいテーマでした。

この発表を聞いて私は大変に驚きました。なぜなら、オルフが昭和38年に弟子のケートマンと共に来日した事が与えた影響の大きさを知ったからです。発表者の西野さんは、養成校を定年退職なさったので、今年始めて研究発表を申し込まれたのだそうです。彼女は、オルフとケートマンの来日講演を聞いた事に触発されボディー・パーカッションを始めたそうで、今日まで36年間も、ボディー・パーカッションを学生や音楽教室の生徒たちに教えていらっしやったのです。今回はその発表会などの様子のビデオ発表でした。

オルフの来日当時は、ブームと呼ばれたそうですが、オルフの考え方を理解できずに、オルフの作曲した曲をそのまま演奏することがオルフだ、と思い込んでしまった人が多かったそうです。そのことが、ブームがすぐに消えてなくなった理由だと聞いていますが、オルフが何らかの影響を日本の音楽教師たちに与えたことは間違いなかったようです。ぜひオルフの来日の様子を知る方々からいろいろな話を聞いてみたいと、今回強く思いました。

「自分史」をビデオを見せながら語って下さった西野さんの発表は、厳密には研究発表という範疇には入らないでしょう。しかし、学会の中には実践報告や自分史等を語るコーナーがあってもいいのではないのでしょうか。学会誌も実践ジャーナルが出来

た事ですし、研究発表とは別枠で、実践報告やこういった経験談などの話を聞く事のできる場所があると、より多くの方が親しみ易くなると思います。

さて、土曜日の夕方はアトラクションで兵庫県立三原高校の高校生による淡路人形浄瑠璃を見ました。拍手が鳴り止まなかった事から察すると、多くの方が「ありがとう。良かったよ。これからもずっと続けてね!」という気持ちでいたのだと思います。

日曜日は研究発表を聞いたあと、午後から中地さんを中心に研究を続けているグループの「プロジェクト研究C」へ足を運びました。『ことばと音楽による即興表現の教育的可能性』というテーマで、オルフの提唱した音楽教育の考え方と、現在の日本の音楽や国語の教育とのかかわりなどが論じられていて、とても興味深いものでした。しかしながら、テーマの大きさに対してわずか2時間という発表時間でしたので、ゲストスピーカーの話の長さや全体のプレゼンテーションに対する工夫が、もう少し欲しかったように感じました。内容が良かっただけに伝え切れなかった部分があったのではないかと残念に思ったのです。熊木さんの指導する小学生の創作した『あいうえおのイメージパフォーマンス』のビデオは、もっとゆっくり見たかったと思いました。・・・などなど、たった2日間にずいぶんいろいろなことを聞き、見て、感じたものです。そして神戸での収穫を、明日からまた授業の中で学生たちに、伝えていきたいと思えます。

ニュースレターweb版では  
個人情報に関する記事は削除しています

\*\*\* 編集後記 \*\*\*\*\*

公募による新しい学会のロゴが決定しました。また英文表記も改められ、名実とも本学会が国際的にも認知されていくことでしょう。学会の全国大会も発表者が若い人を中心に増えています。次年度は東京・武蔵野音楽大学です。更に多くの充実した研究発表が期待されます。一方で実践的な研究も新学会誌を始め、夏期のワークショップというかたちで新たな展開が始まっています。音楽教育の理論と実践お互いが連携した音楽教育研究は我々の願いでもあります。新しい年にも期待しながら。(筒石賢昭)

年末年始をはさむ忙しい時期であるにもかかわらず、このところ出張が続いている。たしかに、そのために日常の仕事が滞ってはくるが、私は出張がそれほど嫌いではない。その理由のひとつに、そこに行っている間はそれ以外の仕事はしなくてよい(というよりも、できない)という刹那的な「救い」もあるが、もうひとつには非日常的な寛容さの心地よい強制があるからだ。たとえ迷路のような小路に迷ったにしても、そこが古い都であったことを考えれば許せる。たとえ砂が舞っても、そこが美しい砂丘のそばであれば許せる(だろう、たぶん・・・ここはこれから行くところだ)。日本海の冷たい風に吹かれても、それが毎年この時期に見る美しい川の畔だと思えば許せる。できることならば、日々の仕事の中でもそういった寛容さを持ち続けたいと思う今日この頃である。(北山敦康)

\*\*\*\*\*

**【日本音楽教育学会役員（2002-2004年度）】**

会長：村尾忠廣 副会長：平井建二・坪能由紀子

常任理事：筒石賢昭（事務局長），奥忍・藤沢章彦・北山敦康（総務），  
加藤富美子・島崎篤子・丸山忠璋（企画）重嶋博・杉江淑子（会計）

理事：浅井良之（北海道），丸林実千代（東北），伊藤誠・今川恭子・  
小山真紀・阪井恵・山本文茂（関東），伊野義博（北陸），南曜子（東海），  
中原昭哉・竹内俊一（近畿），野波健彦・吉富功修（中国），  
田邊隆（四国），木村次宏（九州）

**【事務局住所】** 184-0015 東京都小金井市貫井北町 2-5-22 ハイツシーダ 1-102

**【私 書 箱】** 184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26

Tel/Fax : 042-381-3562 e-mail : onkyoiku@remus.dti.ne.jp

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmes2/index.html>